

令和2年度

# 明るい家庭づくり 入賞作文集



赤磐市青少年問題協議会  
赤磐市教育委員会

## はじめに

皆様には赤磐市の青少年健全育成に対し深い御理解と、日ごろから地域において様々な取り組みをいただいておりますことに、心から感謝申し上げます。

この「明るい家庭づくり作文」は、家族の役割やあり方など、「明るい家庭づくり」「地域とかがわる家庭づくり」等をテーマとして、家庭づくりや家庭教育についての意識の向上に役立てるため、公益社団法人岡山県青少年育成県民会議が毎年募集しているものです。

本年度、赤磐市においては、三六四点の作品応募があり、各学校から選出いただいた、四十九点の入賞作品と、保育園、幼稚園を含む保護者等からの応募九点について、各部門で審査員の方々に最終審査をしていただき、小学生の部最優秀賞六点、優秀賞二点、中学生の部最優秀賞三点、優秀賞一点、保護者の部入賞五点が選ばれました。

小学生、中学生の作品は、家庭での出来事や家族とのふれあいの中から、家族の大切さや自分の役割を見つめ直したことで、家族の姿を見て感じたことなどが、子どもたちの素直な感性で表現され、保護者の作品は、家庭や子どもたちへの満ち溢れる愛情が感じられるなど、コロナ禍の状況下においても、それぞれに素晴らしい作品であったと、選評をいただいております。

家庭は、子どもたちが基本的な生活習慣を身につけ、人間形成の基礎を培う上で重要な役割を担っています。しかし、近年では生活・社会環境の変化、特に今年度は新型コロナウイルス感染症の予防対策に伴う「新しい生活様式」の実践、働き方改革等により、社会の価値観・家庭の様相も多様化しております。そこで、市民一人ひとりが青少年の現状に関心を持ち、地域社会を構成する私たち大人が、どのように責任を果たしていくか、自らの行動を省みながら行動していくことが大切であると考えます。

この作文集が、一人でも多くの人の心に届き、「明るい家庭づくり」がますます推進されることを、心から願っております。作文集発刊にあたり、作品を御応募いただいた皆様、また、選定や審査に御協力いただいた皆様に深謝申し上げます。

令和三年二月

赤磐市青少年問題協議会

会長 友 實 武 則

# 目次

## 小学生の部（最優秀賞）

だいすきぴよんこちゃん	豊田小学校	一年	射矢幸優	1
ぼくのおとうさんとおかあさん	桜が丘小学校	二年	常安遙陽	1
おうちで夏まつり	山陽小学校	三年	森花音	2
母さんの入院	山陽小学校	四年	松田虎大朗	2
働くお父さんを見て	山陽東小学校	五年	石原琉愛	3
私の自しゆく生活	石相小学校	六年	草賀穂乃羽	4

## 中学生の部（最優秀賞）

我が家のルールで広がる家族の笑顔	高陽中学校	一年	山崎惣一郎	5
心に響く料理	馨梨中学校	二年	小山美瑠輪	6
ヒーロー	高陽中学校	三年	青井萌希	7

## 保護者の部（入選）

今年のがが家のふれ合い時間	周匝保育園	保護者	奇峯友子	8
おじいちゃんの思い出	黒本保育園	保護者	是松弥生	9
初めての天文台	佐伯北保育園	保護者	植月悠乃	10
新しい家族の誕生	仁美保育園	保護者	小野田由三子	10
オムツの卒業	赤坂ひまわりこども園	保護者	松田ほなみ	12

「明るい家庭づくり」 入賞作文

## 小学生の部（最優秀賞）

### だいすきぴよんこちゃん

豊田小学校 一年 射矢 幸優

ぼくのいえにはうさぎがいます。なまえはぴよんこちゃんです。ぼくはうさぎがだいすきです。

しょうがつころなうにいるすでおやすみのとき、おかあさんがようちえんでうまれたうさぎをつれてかえつてくれました。くろいけのくろちゃん、ちやいろいけのぴよんこちゃんです。ふわふわのけでちいさくて、とてもかわいかったです。

三しゅうかんぐらいいっしょにあそびました。さんぼをしたり、だっこをしたり、えさをあげたり、そうじをしたりして、まいにちとてもたのしかったです。

ようちえんにうさぎをかえすとき、ぼくはものすごくさみしいきもちになつてなきました。ようちえんのせんせいが、

「さみしいよね。つれてかえつてもいいよ。」

といつてくれました。ぼくは、

「やつぱりつれてかえりたい。」

といいました。そして、ちやいろいけのぴよんこちゃんをつれてかえりました。ものすごくうれしくて、ぼくはおかあさんに、

「ありがとう。ぼくがまいにちおせわをするよ。」

といいました。

ぴよんこちゃんのすきなものは、きゃべつとにんじんとかりかりのえさです。くろーばーもだいすきで、ゆうがたになるとじいじがたくさんもつてきてくれました。あつというまにぴかりんです。ぼくは、ぴよんこちゃんがたべているときのぼりぼりというおとがすきです。

あさおきたときやしょうがつころからかえつたときに、ぴよんこちゃん

をみるとうれしいきもちになります。ぼくもいっしょにぴよんぴよんはねたくなります。だいすきなぴよんこちゃんに、いつまでもながいきしてほしいです。ぴよんこちゃんだいすきです。

### ぼくのおとうさんとおかあさん

桜が丘小学校 二年 常安 遥陽

ぼくのおとうさんは、車のしごとをしています。車のしごとといつても、車のしゅうりをしています。トラックや車など、いろいろな車をしゅうりしています。とまつてうごかなくなつた車やこしようした車をなおしています。大人になつたらぼくもできたらいいなと思います。おとうさんに、

「どうやつてなおしているの。」

と聞いてみると、おとうさんは、

「ラチェットやドライバーや小さいハンマーをつかつてなおしているんだよ。」

と教えてくれたので、すごいなと思いました。大人になつたら車をなおすためのどうぐをつかつてみたいなと思いました。おとうさんは、あぶないものもつかっているのにけがをしないこともすごいなと思いました。ぼくだつたらけがをしてしまいます。車のしゅうりをしているのに、けがをしないことは、本とうにすごいと思います。

つぎに、おかあさんのしごとについてです。おかあさんは、びょういんでかんどしをしています。さいけつをしています。さいけつとは、ちをとることです。ほかに、年をとつたおじいさんやおばあさんのおむつをかえるしごともあります。年をとつた人は歩くことができなかつたりトイレにいつ行きたくなるか分からなかつたりするからです。びょういんには、かんじゃさんがずつと入いんしているの、一日中はたらいっている人がいます。ぼくのおかあさんもよ中にしごとをする時もあります。その時

は、おとうさんとすごします。でも、本とうは、おかあさんともねたいです。一日中ずっといたいんです。そう思うこともあるけれど、ぼくはがまんします。やきんからおかあさんがかえってきたら、たくさん話をします。こんながんばつてはたらいっているおとうさんとおかあさんのことがぼくは大すぎです。

## おうちで夏まつり

山陽小学校 三年 森 花音

今年の夏休みは、友だちをよんで家で夏まつりをする事になりました。コロナで夏のおまつりとかが、どんどん中止になるから、ばあばが家でおまつりをしようと思いついたからです。ゆかたを着て、作ったお面をかぶって、本当におまつりに行くみたいにおめかしをすると聞いて、とっても楽しみでわくわくしました。

ななかちゃんのお父さんは、子どもの時から、たこやきのピックを持っているぐらいのたこやき名人なので、たこやきやさんになります。りんごあめ、やき鳥、かき氷、チョコバナナ、おにぎりなどのやたいがでます。わたしが一番おいしかったのは、ばあばが作ったりんごあめです。それは、カチカチではなくトロトロで、あまくて何こでもほしくいらいでした。ばあばは、カチカチにならないから、くやしいと言っていたけど、わたしは、トロトロのりんごあめがおいしかったです。

それから、外のおまつりでは、ぜったいにできない事ができました。それは、かき氷のシロップ全がけです。全ぶの色のシロップをかけたら、むらさき色になりました。氷というよりスライムのようになって、きれいでした。

ゲームの店もたくさん作りました。点数のパネルのあなに、たこやきボールをなげるたこやきなげ。しゃてき。ワニワニパニック。空気ほうでポンポン入れ。おかしつり。箱の中の物を手だけでさわって当てるわたし

は、だれでしょう。全ぶ手作りしました。わたしが一番がんばつたのは、しゃてきのじゅうです。はじめて、わりばしとわゴムでじゅうを作りました。ごはんを食べるわりばしで、てつぼうができるのかなときいしよは不安、だつたけどじいじが、

「まかせとけ。じいじは、わりばしでつぼうのたつ人じゃ。」  
と言ったのでじいじに教えてもらいました。むずかしかったのは、どうやってわゴムをひっかけて、それをうてるようにするかという所です。頭を使って考えて、その場所が決まったら、そこにわりばしを切っておいていきます。それをわゴムでしっかりぐるぐるまきにします。わりばしは、はさみだけではなくて、ペンチを使って切りました。ペンチは、とてもよく切れるので、きんちょうしました。しゃてきのまとは、弟とおばけを書きました。どっちがこわいおばけをかくことができるかをしようぶしました。

と中で、たこやきボールが一こなくなったり、ダンボールがやぶれたりしましたが、とっても楽しかったです。

外でのおまつりにも行きたいけど、おうちのおまつりは、すずしくて何回でもゲームができるのがよかったです。いろんなものを手作りするのは楽しいなと思いました。また、やってみたいです。

## 母さんの入院

山陽小学校 四年 松 田 虎大朗

七月二十七日の月曜日、学校におばあちゃんがむかえに来た。母さんは、いそがしいのかな、今日はおばあちゃんの家でばんご飯を食べるのかなと思っていた。

買い物に行くと、パンコーナーで

「朝、いつも何のパンを食べているの。どのパンが好きなの。」  
と聞かれて、おばあちゃんはわざわざなんでそんなことを聞くのだろうと

思った。レジあたりで、

「ママが入院したのよ。退院まで一週間くらいかかるって。」  
と言われた。え、なんで、と思ったけど、なんとなく理由は聞けなかった。

車の中にもどって、おなかがいなくて入院したことを聞いた。頭がこんらんして、とにかくシヨックだった。

妹はおばあちゃんの家にとまるのをよろこんでいるだけで、全然分かっていないみたいだった。最初の日、夜になると妹は、

「ママがいないよー。」

とワーワーさわいで、ぼくはなかなかねむれなかった。しょうがないだろ、と思ってイライラしていた。

おばあちゃんの家から小学校はとても近い。いつもは七時には家を出ないと間に合わないのに、おばあちゃんの家からだと七時五分に出ても十分間に合う。お風呂も広くて、湯船の中にはすわれるスペースもある。ねこもいてモフモフでとてもかわいかった。そうめん流し機で食べるそうめんもおいしかった。

でも、何かが足りなくて、何かがちがう。家でもなくて、まくらでもなくて、朝ご飯でも夕飯でもない。

七月三十一日の金曜日、夕方におばあちゃんと妹と三人で病院に母さんをむかえに行った。

母さんがげん関から出てくると、妹は、

「ママー、ママー！」

と大はしゃぎで、かなりうるさかった。

おばあちゃんの家に戻って、母さんがいることがうれしかった。何かが足りなくて、何かがちがうと感じていたのは、母さんがいないことだったのだなと思った。

母さんは入院していた三日間、ご飯を全く食べず、点てきという注しやみみたいなものをつけて、車いすにも乗っていたそうだ。ご飯を三日も食べられないなんて、ぼくにはたえられないなと思ったし、母さんも大変な思いをしたのだなと思った。

八月一日の土曜日、母さんと、ぼくと、妹は、いつもの家にもどった。朝、起きたときには、「あれ、今どっちの家だっけ。」とこんらんしたし、月曜日からは、朝、七時に家を出て学校に行かなければならなかったのは大変だったけど、やっぱりこの家が落ち着くし、父さん、母さん、ぼく、妹の四人そろった家族が一番だと思った。

## 働くお父さんを見て

山陽東小学校 五年 石原 琉愛

暑い夜の中、ひいおじいちゃんがトイレでたおれているのを発見して、お父さんに伝えると、お父さんは急いでひいおじいちゃんの所にかけつけてくれて、じょうたいを見てもらいました。消防署に電話をかけたり、ひいおじいちゃんの通っている病院をメモしたり、あせが出たりしていたのでふいたりなど、救急車が来るまでいろんなことをしてまわっていました。救急車が来るとお父さんは、今までの状態や、メモしたことなどをくわしく伝えてくれました。このことがきっかけで、「お父さん、すごいな。」と思っただし、消防士はどんなことをするんだろうと思いました。

お父さんのしよく業は「消防士」です。仕事の内容は、火事の火を消す仕事や、交通事故でケガした人を運んだり、災害にあっている人達を救助したり、急病の人を病院へ運んだりする仕事などがあります。なぜ消防士になったのか聞いてみると、小さいころから消防士にあこがれていて、大きくなるにつれて「人の役に立ちたい。」や、「人の命をすくいたい。」と思う気持ちが大きくなって、小さいころからあこがれていた消防士になろうと思っただし、そのゆめをかなえるためにたくさん努力して、たくさん勉強したそうです。

そんな努力をしたお父さんは今はりっぱな消防士になっているし、きん急じたいでも冷静に考えて行動していて自まんのお父さんです。ほかにもお父さんのすごいと思っただし、二つあります。

一つ目は、休日にも出勤することがあることです。消防士の人手がたりなくて休日にも電話がかかってくるので、出て行くことがあります。お父さんは大変だと思うけど、それほど消防士の人たちにたよられているんだと思います。わたしは、お父さんの仲間や友達みたいな人たちを作っていました。いなと思えました。

二つ目は、お仕事でつかれていても、いつしよに遊んでくれることです。わたしはバドミントンが好きなのでよくお父さんに付き合ってもらって練習しています。あんまり体を動かすことがクライな自分でも、唯一、得意なスポーツで、お父さんはわたしより上手なので、いつかはお父さんと同じくらい上手になって勝ちたいです。勝ったらお父さんに、「上手になったな。」などの言葉を言ってもらいたいです。

お父さんは消防士で、いつもいろんな人の命を助けていて、その家族の人達の幸せを守っていてわたしはすごいなと思いました。わたしのしよ来のゆめは、「助さんし」です。しよく業はちがうけど、お父さんみたいな仲間を作って、みんなの幸せを守りたいです。

## 私の自しゆく生活

石相小学校 六年 草 賀 穂乃羽

「明日から長い期間、学校はお休みです。」

と、先生が真けんな顔で言いました。私は、びっくりした半面、少しうれしくなりました。私は、家に帰って、

「明日から、休みかあ。どうなるんだらう。」

と不安になりながらも、自しゆく生活が始まりました。次の日から母に、「学校の時間割通りにすごして、勉強して。」

と言われました。私とお兄ちゃんと弟の自しゆく生活は学校と同じ「キーンコーンカーンコーン」と口で言うチャイムの音が始まります。そして、そのチャイムは私が担当する事になりました。でも初めは、なかなかなれ

ずうまくいきませんでした。毎日続けていくうちに、ある課題が見つかりました。それは、時間いっぱい、集中して勉強することです。いつもの学校生活では、先生やクラスの友達と四十五分間勉強してありますが、家で自分の机で一人で勉強するといつもより長く感じました。そこで集中がとぎれてしまいうちに自分の机からはなれて、お兄ちゃんや弟が勉強をしているじゃまをしてしまいます。この課題を解決するためにある方法を考えました。それは、しつかり学習内容を考えてノルマを決める事です。この方法で早速やってみると、全くちがいました。危機感をもち、すぐに立ち上がらずに四十五分間集中して勉強ができてうれしかったです。一日のノルマを終えると、その都度達成感を感じました。そして、自分の力になっていったように思います。だからこの方法を毎日続けていきました。学校から出された宿題だけでなく復習や予習を中心とした自学にも取り組んで積極的に勉強するようになりました。この方法でよかつたなと思いました。

他にもこの休校になってがんばったことは運動です。運動の中でも特にがんばったのは、ジョギングです。なかなか外に出る事が少なくなり、運動不足になってしまったので毎日六分ほど走りました。私はジョギングが初めてで、苦手でした。一緒に走ったお兄ちゃんはいつもどんどん遠くなつて、私よりもずっと前にゴール出来ていてすごいなと思いました。まずは、走る時に「同じペースで」を心がけていきました。すると少しずつ体力がついてきて、お兄ちゃんにも少しついていけるようになりました。タイムが前日より縮まっていたらすごくうれしかったです。

私はコロナの自しゆく生活の中、この時間を使って、家族や兄弟と一緒に考えたり、工夫したりして勉強方法を見つけたたり、自分から運動することができました。家にいる時間が多い中で、家族と共に今しかできないことと今だからこそできることをしつかりやっていき、この状況をマイナスにとらえず、プラスに考えて、どんな時も楽しくすごすことができました。思います。



## 中学生の部（最優秀賞）

### 我が家のルールで広がる家族の笑顔

高陽中学校 一年 山崎 惣一朗

「お手伝いは、家族みんなで分担しよう」

これは僕の父が決めた我が家のルールです。僕には妹と弟がいますが、僕達兄弟がお手伝いを全くしない日が続いた時でした。きっかけはある日曜日、お母さんが、

「お母さんも一日でいいから家事から解放されたい。みんなが家の家事を少しずつ分担してくれたらすごく楽なのに。」

僕は、父が決めたこのルールを聞いた時、正直に言うとお面倒くさいと思いました。お手伝いをするという事は良いことだと思いましたが、そこまでこだわらなくてもいいと思っていました。また、お手伝いをすることで、自分の自由に過ごせる時間が奪われてしまうのも嫌だという思いもあつたからです。

なぜ、父はそこまでお手伝いをやろうというのでしょうか。どうして「家族みんな」なのでしょう。そこには父の、いつも家族が安心して暮らせるよう家事をしてくれる母への優しさ、僕達の将来を思っていてくれた気持ちで隠されていたのです。

父は、毎朝早くから夜遅くまで、僕達家族のために一生懸命仕事をしてくれます。そして、大変物知り、僕が分からないことがあつた時には、「えー。中学生になって、そんなこともわからないの。」

と僕に言いながらも、いつも最後まで丁寧に教えてくれます。僕の尊敬している自慢の父です。

そんな父が僕達兄弟に、

「お手伝いは、家族みんなで分担しよう。」

と言いました。夕食の時に家族みんなで家事の分担をどうするかについて意見を出し合いました。まず、僕達兄弟三人は洗濯した服を取り込み、兄

弟のそれぞれのかごに分別します。兄弟で協力して分別した服をそれぞれがたんでダンスにしまうことにしました。そして、夜8時までには、全員入浴し終わり、夜更かしはやめて学校での生活のように家庭の中でもルールを守り規則正しい生活を送れるように心がけよう。と話し合いました。その頃の僕達の生活は、テレビを見たり、マンガを読んだりして、だらだらとした生活を送っていました。今思えば大変効率の悪い生活だったと思います。やるべきことをやらずに、自分の好きなように時間を使っていました。きっと父は、そんな僕達の生活態度に不満を持っていたのだと思います。

今思えば、中学生になってそんな生活を送っていて良いのだろうかと思いません。宿題が多くても、集中して真剣に取り組めば、あつという間に終わるだろうし、自分の力にもなると思えます。また、残りの時間を自分の自由に過ごす時間を上手に使うことができれば、僕自身の大きな成長につながると思います。父があつた時、僕達にこのルールを決めてくれて本当に良かったと思います。そのおかげで今は毎日規則正しい生活を送ることができています。そして、家族の一員として「お手伝いをする」ということの大切さを改めて実感することができました。

「お手伝いをする」ということは「あたり前のこと」であり、「誰かのために自ら進んで取り組むこと」だと僕は思います。自分のとつた小さな行動で、人を笑顔にすることができると思えます。とても小さなことだけど、その小さなことをこつこつと積み重ねていくことで、これからの自分の人生のプラスになると思えます。お手伝いをする事で、見返りを求めず、喜びや、達成感を得ることのできる人こそ「あたり前を常にできる人」だと僕は思います。僕は、その「あたり前を常にできる人」になりたいです。そのためにも家族で決めた我が家のルール、「お手伝いは、家族みんなで分担しよう。」このルールだけは、これからどんなに忙しくても守っていきたいと思えます。

また、家族みんなで行うことによつて、時間を上手に使うことができ、家族で団らんする時間も増えると思えます。その家族団らんの時間が僕達の人生の大きなエネルギーになると思えます。父が僕達に言った言葉は僕たちにとつての魔法の言葉だと思えます。この言葉を合言葉にして、僕達家族の笑顔がもっともつと増えるといいなと思えます。

## 心に響く料理

磐梨中学校 二年 小山 美瑠輪

「お母さん、夕ご飯できたよ。」

工房でお菓子をつくっていた母を妹が呼んだ。私の母は仕事で忙しいので夕ご飯は中一の時からずっと私がつくっている。とり肉のミンチを使ったハンバーグや、ささみを使ったカツ丼など、食材から料理を考えてつくるのはわくわくして楽しい。母が大変で少しでも助けたいと思っただけから私は夕ご飯をつくっている。実際、母も助かると言ってくれているのでうれしい。自分も夕ご飯をつくるのは楽しいのでがんばれる。私の母は家でケーキやクッキー、シュークリームなどさまざまな種類を作って売る仕事をしている。だから家はクッキーの香りや焼きたてのケーキの香りといった。母はお菓子をつくる時真剣な顔つきだ。母はお菓子をつくる時まるでお菓子と会話をしているかのようにつく一つの工程をていねいにおこなっていてよいいな事は考えずにお菓子のことだけを考えている。そんな風に私には見えた。母の姿をずっと見ていた私は母が憧れの存在になった。

私は母のつくるお菓子のようなおいしい料理やお菓子がつくりたいと思った。そのためには料理やお菓子は味をおいしくしないとダメなと考え、いっぱい練習をしておいしくつくれるようになるかと考えた。それで私はレシピ本を見てお菓子をつくることにした。クッキーをつくったりマフィンをつくったりケーキをつくったりもした。ところが母のある言葉で私の考えは変わった。

母がクッキーの型をぬきながらふと、

「心に響くお菓子ってなんだろう」

といった。その時私の中に何かがよぎった。私の中にも母と同じ疑問がうまれた。心に響くようなお菓子ってなんだろうな。

また、私は普段から料理などをつくっているけど、その料理は食べている人の心に響いているだろうか。そもそも「心に響く料理」なんて考えた事もなかった。

母の言葉は私が料理やお菓子づくりをするうえで何が大切かを深く考えるきっかけとなった。私は料理をつくる時はまず、おいしい物をつくりたい。

私がおいしい料理をつくと家族は笑顔になってくれる。その笑顔で私はつくってよかったという気持ちになる。二つ目は見た目。私は悩んだ。これだけで本当に、「心に響く料理」になるのだろうか。私は母に聞いた。

「心に響くってどんなもの？」

母は少し考えてから答えてくれた。

「うん、難しいけど食べる人の事を考えて、どんなものもいいか自分ですべて一生懸命あみ出して心をこめてつくることかな。」

母は「心をこめる」というのを大切にしているのか。私は母の話聞きながらそう思った。それと同時に私は心をこめてつくっているのだろうか。自分が思っている「心をこめる」というのは本当に心がこもっているのだろうかと思っただけ。「心をこめる」というのは料理でも友達でもいえることだ。料理をつくる時だけに心をこめるのではなく、料理を食べる人のことを考える。その日の体調。その日の様子。その時の季節など、料理をつくる前から心をこめることが大切だと私は思った。相手が熱が出ていたら食欲はないだろうし、毎日ハンバーグではあきてしまう。そんな風に相手と自分をつなげて考える。その後も母はいろいろと語ってくれた。お菓子づくりで何よりも大切なのは自分をコントロールすることだとか、自然から色やデザインを学んでお菓子にとりいれることなどだ。私はコントロールという言葉聞いてはっとした。自分をコントロールするということは自分の体調を整えること。料理には自分の気持ちが見れる。怒りながらつくった料理よりこにこしながらつくった料理の方がおいしい。自分で自分のことを管理することが大切なのだ。「心に響く料理」の答えは母もまだはつきりとはわからないらしい。私は母の話聞いて私の中で、「心に響く料理」への思いがまとまった気がした。「心に響く料理」とは一回一回つくる調理、お菓子に対して全力で向き合っただけで思いを込めてつくること。そしてどうやら相手が好きのかを考えて、ていねいにつくることで、少しでも「心に響く料理」に近づけるのではないかと私は考えた。私はこれから経験をつんでいこうと決めた。

私に料理というものをあたえてくれた母に感謝している。一緒にお菓子について話したり悩んだり。「憧れ」という位置にいた母に近づいたと思う。私は母からこの先もたくさんさんの宝をもらおうだろう。

高陽中学校 三年 青井 萌 希

「もしもし。はい、わかりました。」

そう言つて私の父や母は仕事へ向かう。険しい顔つき。私が小さいころからそうだった。

「どこに行くん？いつ帰つてくるん？」

幼い頃の私はいつも同じ言葉で聞いた。

「お仕事だよ。また後で帰つてくるから。」

と、いつも同じ返事が返つてくる。どんなに幼くてもすぐにこの言葉が返つてくることはわかっていたが、聞かないと安心できなかったのだ。

父と母の仕事は、火事から人を助ける消防士。いわば、命を持たない炎と戦うヒーローだ。炎の動きは読めない。だからこそ、私は「また後で帰つてくる」という言葉があまり信じられなかった。「もしも何かあったら……」と、いつもただただ心配していた。それでも、そんな危険を目の前にしても前向きな姿勢で仕事に臨む両親をかつこいいと心から尊敬し、「いつてらっしゃい」という言葉で応援していた。こんな父母はとてもかつこよく、私の自慢だった。

だが、悪夢は突然訪れるものだ。ないといいなといつも願っていた私の心配が的中してしまったのだ。

小学五年生のある日、学校から帰り、家の前で待っていたおばあちゃん

の口から聞いた言葉の衝撃の大きさに、体に電流が流れたようだった。

「お父さんがなあ、足に大怪我して病院に入院することになったんよ。じやけえ、あと何ヶ月かは家に帰つてこんらしいわ。」

悲しさと共に「仕事からは絶対に帰つてくるんじやなかったの。」というやり場の無い怒りのような感情がおしよせてきた。もちろん、怪我はしたくてしたわけではないことは聞かなくてもわかる。今は、真つ先に父の容体が知りたい。だが、何故か約束を破られた気分になったのだ。その日は一日中悲しく、寂しく、言葉にならない想いがあふれた。

それから、父が家に居ない生活が始まった。家族が一人居ないことがこんなに不安なのかと思ひ知らされた。あたりまえの生活は大きく変化した。

今まで父がしてくれていた家事は、私と妹が分担して行うようになり、大変だった。あたりまえだが、父の存在の大きさを思い知らされた。

だが、この父が居ない期間で最も苦しく大変だったのは母だったと思う。仕事のない日は毎日病院へ通い、父のお見舞いに行き、家へ帰ると私達が行つた倍の家事などの仕事がある上に休む時間すらないぐらい大変な生活をしてきた。だから、ストレスは溜まっていたと思う。しかし母は、そんなストレスを一切顔に出さず、いつも笑顔だった。今まで見たことのないくらい

の強さを感じた。母は家の中でもヒーローだった。そんな日々が長く続いた。先が見えない不安と我慢はピークだった。ついに父が病院を退院し、家に帰ってきた。何日ぶりかわからないが、やつと、やつと、やつと帰ってきたのだ。父が居ない間の想いを吹き飛ばすくらい嬉しさはあふれた。父が笑顔でリビングに戻ってきた時、私と妹は大声で叫びながら駆け寄つた。

「お帰りパパー!!」

父はしわくちな満面の笑みで、「ただいま!長い間心配かけてごめん。パパはこんなことになつたけど、絶対三人のことは一生守る。」

と、私と妹と母に向けて言つてくれた。改めて「父」という一家の大黒柱の存在の大きさを知った。後で聞くと、入院している間も家族のことしか考えていなかったそう。怪我をしても、家に居なくても、遠く離れていても、父は私達を守つてくれていたヒーローだった。

我が家には二人の最高のヒーローがいる。町の人々、生活、家族を守り、支え、元気を与えてくれる私にとって憧れの存在。どんな苦しいことがあつても家に帰ればいつも二人がいてくれる。何があつても大丈夫と思える。最高の両親だから。そんなヒーローの背中を見ながら、私も誰かのヒーローになりたいと思つている。

私の将来の夢は、医療の力で人の命を救う医者になることだ。両親とは違うフィールドだが、私も父と母のような誰かにとつてのヒーローになりたい。いや、なるんだ。

## 保護者の部（入選）

### 今年のが家のふれ合い時間

周匝保育園 保護者 奇 峯 友 子

「きょうはカルタするー!」

と、かわいく言うのは三歳の息子です。わが家は、五年生、三年生、年長、三歳の息子達と父、母の六人家族です。日々、様々なドラマがあり、あっという間に過ぎ去っていく毎日を送っています。その中で最近のが家の子供達とのふれ合い時間についてご紹介します。

それは、夕食を済ませるとすぐに始まります。四男が、「きょうぼくカルタするー。みんなーカルタするよー。」と声をかけます。

「はい。」

と三男はすぐに寄って行きます。

「また?はいはい。」

と次男もまんざらでもない表情で寄って行き、食後の片付けをし始めている私を横目に、カルタを三人で並べます。

「母さんも手伝って。」

と言われてから

「わかったよ。」

と私も加わります。そして、

「ぼくがよむ!!」

と四男が言います。兄達と私は

「いいよー。」

「じゃあ、『おどれおどれ、さかなさかな』。」

「さかな?あーこれだ。これ?」

と次男が『さ』のカルタを見せると

「うん、そう。」

と嬉しそうにこたえます。

「はい、つぎー。『パン、パン、カエルもいるね』。」

「パン?パンか?はい!!」

と私も取ります。これはロールパンのことで『ろ』が正解でした。

『マシユマロマシユマロ、おいしいね』。」

ここで、長男が

「あーぼくもするー。」

と参加します。

「えーどれ?」

と長男は困惑気味に笑います。

「読むのがめっちゃくちゃけんなー。難しいけどおもしろいよなー。」

と次男が言い、みんなで笑います。

「これ?」

「そうそう。」

唯一合っている『ま』の取り札を長男が取りました。読み手の四男も大満足で読んでいて、言い方も面白いのでみんな楽しい気分になります。又、私も兄達も、四男が上手に言うようになり、成長を感じて嬉しいのです。

そして、ふと思ひ返します。長男が三歳の時にこんなに楽しくしていたのだろうか。笑って一緒に遊んでいたのだろうか。遊びたいと思っていたことは覚えています。しかし、次男がまだ幼く、私自身の体調も良くなかったためできていなかったと思います。次男、三男は兄と遊べていたと思います。長男には、少しさみしい思いをさせていたのかなと思いましたが、それが今になって、やっと長男とも一緒に、笑って遊べる時間を過ごせ

ていると感じています。子供達それぞれですが、同じ時期に同じ事をしてやれなかったと後悔する気持ちもあります。それでも少し大きくなつてから、こうして楽しい時間が作れたことは、私にとつても嬉しいことです。

今年は、今まで誰もが経験したことのない状況で、不安な事が多いです。子供達も今までの日常とは変わってしまった事でストレスや不安の中、それに負けずに成長してくれています。私も今できる事を精一杯子供達にしていきたいです。助けてくれる周りの人達に感謝しながら、ちよつとしたふれ合い時間も大切にして、子育てを楽しみたいです。

## おじいちゃんの思い出

黒本保育園 保護者 是松 弥生

「あんちゃんにおじいちゃんいるの?」

ある日、三男に聞かれてびっくりしました。少しは、おじいちゃんの記憶があるものと思ひ込んでいたので、その言葉を聞いて呆然としました。

病気療養中だったおじいちゃんは、三男が二歳になるのを見届けるのかのように、誕生日の朝に息をひきとりました。

我が家にとつて、十年振りに誕生した三男。生まれる前からあふれんばかりの愛情を皆から注がれてきました。

おじいちゃんも、本当にかわいがつてくれて、毎日様子を見に来ては、成長と一緒に喜んでくれました。言葉が出る様になり、「じいじ」と呼ばれると、「はあい」と嬉しそうに答えていました。抱っこしてもらい散歩へ行ったり、おもちゃで遊んだり、絵本を見たり、一緒にいる時間はたくさんあったように思いましたが、まだ幼かったのでしょうか、全く覚えていな

かったのです。

一緒に写っている写真を見たら、おじいちゃんがいた事が理解できるだろうと思ひ、写真を探してみました。しかし、一緒に写っている写真は一枚も残っていませんでした。スマホの中も、子供達の写真をしまっている引き出しの中にもありませんでした。三人目ともなると、三男の写真自体の少なさに、探しながら、申し訳ない気持ちにもなりました。

一緒に写っている写真はありませんでしたが、思い出の品は残っています。おじいちゃんがプレゼントしてくれた、パトカーのおもちゃや、手押し車、手作りの椅子、そんな品々を見せながら、

「おじいちゃん、あんちゃんのことを大好きだったんだよ。」  
と言うと、少し照れたように、満面の笑みを浮かべました。

孫たちが花火をしているのを見るのが好きだったおじいちゃん。夏になると、大きな花火セットを買ってきてくれては、毎晩の様に庭で花火をし、その様子を満足そうに眺めていました。あの頃は、やっても、やっても、なかなか減らない花火に困り、やったふりをして、こつそりいくつか隠していました。その頃の花火も、思い出の品の一つとなっています。

口数は決して多くはなかったおじいちゃん。病気療養中も、弱音を吐かず、生きる事に前向きでした。しかし、日に日に病状が悪化し、話す事もほとんどできず、目を閉じて寝ている日が多くなりました。

亡くなる数日前、お見舞いに行つた際も、その様な状態でしたが、もうろうとする意識の中、三男が、

「じいじ。」

と、耳元で呼びかけると、顔をわずかにこちらへ向け、かすかな声で、

「はあい。」  
と答えたのです。その時の光景を、今でも鮮明に覚えています。その時の「はあい」が、最後に聞いた声となりました。

孫の呼び掛けに、一生懸命に答えようと、最後まで弱っている姿を見せ

まいとする、おじいちゃんの意地と優しき、そして、深い愛情を感じました。

あれから四年。今年も誕生日と命日がやってきました。  
おじいちゃんからもらった愛情は、これからもしつかり伝えていきます。  
おじいちゃん、これからも見守っていて下さいね。

## 初めての天文台

佐伯北保育園 保護者 植月 悠乃

八月上旬、家族みんなで竜天文台に行きました。きっかけは映画「ドラえもんカチコチ大作戦」の最後にドラえもんとのび太が家の屋根の上に置いた天体望遠鏡で星を覗いているシーンをみて子どもたちが興味を持ったからです。広報で竜天文台の観望会のお知らせを何度か見ていたので、さっそく電話をしました。

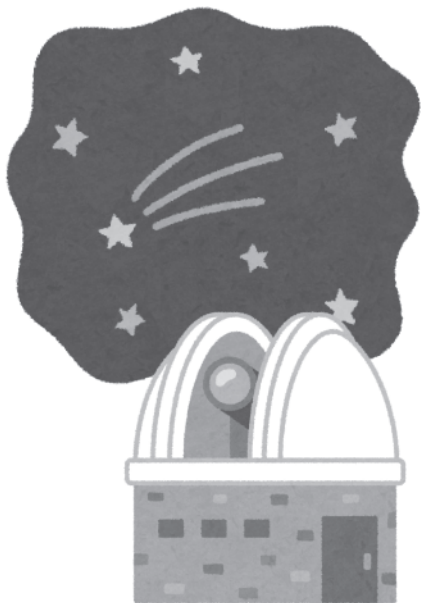
竜天文台は山の上であり、三階ドーム内に直径5mの望遠鏡が設置されています。数日前に電話予約をしたので星が観られる時間帯の八時に予約することができました。当日の夕方、雨雲がかかっていたおり、天文台の職員の方から「今日は観られません」とお断りの電話が来ないか心配でしたが、キャンセルの電話がなかったので予定通り天文台へと向かいました。天文台に到着すると雲が切れて所々星を観ることができ、天文台を開けてもらえることができました。

新型コロナウイルス対策で消毒や検温、情報提供の同意書を記入してから、みんなで天体望遠鏡が設置されている部屋まで行きました。初めて見る天体望遠鏡は大きく、みんな興味津々でした。ですが、精密機械でもあるので触ってはいけない部分もあり、子どもたちにむやみに触らないよう

話をするのに苦労しました。職員さんから説明を受け、ドームの天井を開放してもらい、望遠鏡のレンズを一人ずつ覗くと、土星の環を見ることができました。子どもたちも「これが土星だよ。輪っかが見えるかな？」と尋ねられると「見える」と言い、何度もレンズを覗いたり、土星の名前を言って確認したりしていました。順番にレンズを覗き、職員の方に質問をしていると、あつという間に十五分が経ち、無事観望会は終わりました。

きっかけは映画のワンシーンでしたが、私たち家族にとって夏のよい思い出になった一日でした。

その帰りの車内で子どもたちが「今度は地球がみたい」と言い出したので、思わず笑ってしまいました。地球は望遠鏡では見られないので、家に帰ってユーチューブで「地球」と検索し、地球の映像を見ました。興味深く見ている姿を見て、改めて天文台に行つてよかったな、と感じました。夏が終わり、秋、冬になれば空気が澄んでより星空を観る機会が増えます。その時が来たら、また天文台に行つて、夏とは違う夜空の星を家族みんなで見たいと思います。



## 新しい家族の誕生

仁美保育園 保護者 小野田 由三子

我が家は子供六人の八人家族です。末っ子はこの七月末に生まれたてはやはや。この子の誕生をそれはそれは楽しみにしていた上の子達。外からでもわかる位の胎動があればおなかに向けて伸びてくる手、手、手。今まで動いていたのにピタリと止まる胎動に、

「出てきたら腕がしびれるまで抱っこするけんね！」

と長女はお腹に向けて宣言。宣言通り、生まれてからは自分の用事をさつさと済ませ抱っここの準備完了。やっぱり五人のお姉ちゃん！頼りになりません。

さて、子供達に赤ちゃんがお腹にいますと報告をした時の事。反応はそれぞれで、うっすらと気付いていたであろう上の子はやっばりなとニヤニヤ。下の子達は

「本当？やったあ」

などとても喜んでくれました。病院へ定期検診に行けば、

「赤ちゃん元気だった？」

と超音波の写真を楽しみに待っていてくれます。今回は最後のお産だろうからみんなに立ち会ってもらいたいな…と思っていました。コロナウイルスの流行により立ち会いは夫のみと病院で取り決めがあり、残念ながら子供達の立ち会いは夢に終わりました。コロナウイルスの影響により、我が家が三月から小学校が休校、保育園も家庭保育が出来るなら…とこちらも自主休園。そうなると、日中静かな生活から一変、常時賑やかな生活に変わります。お腹もだんだんと大きくなる時期だったので、子供達が、ご飯一緒に作る！洗い物する！と言ってはくれるものの、ついつい

「ごめん。超特急で作らなんけんまた今度お願いね。」

となかなかこない。今度<sup>が</sup>、子供達のやる気スイッチを無くしてるなあ…。余裕がなくなってくると、どうしても「また今度」「今じゃない」という言葉が気付かないうちに増えてしまい、余裕のない自分に反省する日々を送っていました。そんな中、お風呂の方から音がするなと思えば、下三人がお風呂掃除を頑張ってくれ、長男はシューズを洗ってくれたり、お姉ちゃんはお手洗いを掃除してくれたり自分たちに何が出来るかを考えお手伝いをしてくれています。

「ありがとう。助かったあ」

と伝えると嬉しそうに

「いいよ」

とはにかみながら笑顔を見せてくれます。そんな顔を見ると、もっとお手伝いする！と言ってくれた時にちゃんとしてもらわないといけないな…と改めて反省します。そうこうしていると、あつという間に臨月になりいよいよ出産となりました。子供達とはしばしお別れです。

「産声ちゃんと録ってきてねえ！動画も撮ってきてねえ！」

とリクエストを受け、いざ産院へ。思いの外時間がかかったものの無事に六人目が誕生し、出産動画も看護師さんに撮って頂きました。生まれたての赤ちゃんにどんな反応をするのだろうか？昨日まで末っ子だった二男はお兄ちゃんになってくれるのかな？という心配をよそに、テレビ電話をすると

「かかあ！おめでとう。赤ちゃん産んでくれてありがとう！」

など、本当に嬉しい言葉をいっぱいかけてくれました。ああ、本当にこの六人の宝を大事にしていけないといけないなと改めて思いました。時々鬼になってしまうこともあるけれど、少しだけ優しい鬼になれるように頑張りたいと思います。入院中は、夫、子供達、義姉に色々頑張ってもらいました。私は、末っ子としばしのまったりタイム。たまに子供達の幻聴を聞きながら、退院の日を迎えました。さて、どんな反応をするかな？おも

ちゃんにならないといいけどな。と久しぶりの帰宅に胸を膨らませて、いざ子供達の帰りを待ちます。ドドドドド。

「たっだいまあ。うわあ、かわいい！」

「抱っこするー」

すごい勢いで帰って来た兄弟達の洗礼を早速浴び、順番に抱っこされ、うえーん。びっくりしたけど、こんなにいっぱい兄弟が居て、みんなが可愛がってくれて嬉しいね。兄弟が多いと大変な事も多いと思うけど、その分嬉しいこといっぱいあるからみんなでニコニコ暮らしていこうね。

## オムツの卒業

赤坂ひまわりこども園 保護者 松田 ほなみ

「あー、オムツがない」

長男がお風呂あがりにもはいているオムツがない。昼間は完璧にオムツは卒業しているのだが、寝る時だけはいつもオムツをはいている。何度かパンツで寝てみようかと誘ってもなんだか不安なようで、オムツの方がいいと言われ続けていた。私も寒い時期におもらしされても大変だからという思いもあり、そこまで強くは言わなかった。でも今日はオムツがない。これは今しかないと思い、

「パンツで寝てみよう」

と言うと、これまで嫌がっていた長男があっさりパンツをはきた。これはもしかしたらオムツ卒業ができるかもしれないと期待が膨らんだ。寝る直前にしっかりとトイレに行かせ、準備万端でお布団に入った。夜中長男が目さまし、寝ぼけながらトイレに行き、またすぐに寝てしまった。朝が来て起こしてみると、もれていなかったたので親子で大喜びした。本人

も少し自信がついたようで、次の日もパンツを嫌がらずはいて寝てくれた。また寝ている途中で起き、トイレに行き朝を迎えた。二日目ももれていなかった。でも途中で起きてしまうのが気になる。まだおしっこをたくさんためられないのだろうか。そう思いながらも三日目を迎える。この日は途中で起きない。大丈夫だろうかと心配していたが、この日も成功した。本人も親もびっくり、こんなに早くオムツを卒業できるとは思ってもみなかった。ところが四日目、寝ている途中で起きたが少しもれてしまったようだ。寝ぼけているのでとりあえずトイレに行き、着替えをすくすぐに寝た。朝になり起きると、

「今日ももれてないよ」

と満面の笑み、長男の中では昨日の事は覚えていないので、今日も成功のようだ。一緒にすごいねとたくさん喜んだ。そうしているうちにだんだんとオムツをはかない事が当たり前になり、長男の中で何かが変わったようだ。今まではこちらからトイレに行ってから寝ようねと言っていたが、自分からもれないように寝る前にトイレに行くようになった。少し失敗してしまう日もある。そんな時もきちんと親に伝えられるようになった。オムツ卒業という一つの事により、自信が生まれ、自分から考え、行動するという事につながり、すごく成長できたのではないだろうか。私がオムツを買い忘れた事で始まってしまった事ではあったが、今思えばいいタイミングだったのかもしれない。子供にやれば出来ると言うのは簡単だが、実際やるまでには不安があったり、勇気がでなかったりする。それは親も同じだ。でも今回、仕方なくではあったが、お互いにやってみようと思えた事がよかつたと思う。やってみて出来たという自信、失敗しても大丈夫という事、たくさんの子供の成長を通して、親も一緒に成長させてもらったオムツの卒業であった。



◎審査員名簿（令和2年度）

市内小中学校			青少年育成運動推進指導員・推進員		
地区	学校名	氏名	地区	役職名	氏名
山陽	山陽小学校	頼正浩	高陽	推進員	有友俊二
	山陽西小学校	羽原智代		推進員	内山孝子
赤坂	軽部小学校	宗高麻衣	桜が丘	推進員	畑啓允
熊山	豊田小学校	小笠原寛子	赤坂	推進指導員	幡山寛念
	磐梨小学校	村合飛鳥	熊山	推進員	大森ひとみ
吉井	仁美小学校	大坂伸一	吉井	推進員	小川弘晃
山陽	高陽中学校	頓宮佳子			
	桜が丘中学校	法師恵美			
赤坂	赤坂中学校	金谷優子			
熊山	磐梨中学校	行本博恵			
吉井	吉井中学校	梶山靖弘			

◎出品総数

	山陽	赤坂	熊山	吉井	合計
小学生の部	71	3	27	14	115
中学生の部	132	32	76	0	240
保護者の部	1	3	0	5	9
総数	204	38	103	19	364

◎入賞数

小学生・中学生の部						保護者の部	
最優秀賞	9点	優秀賞	3点	入選	37点	入選	5点

# 明るい家庭づくり入賞作文集

令和3年2月発行

赤磐市教育委員会事務局 社会教育課

〒709-0816

赤磐市下市337

電話 086-955-0783